

〔講演要旨〕

愛媛県の新しき花で発生した病害について（1）

上田 進（愛媛経済連農業技術センター）

近年の花き類の生産は年々増加している。そのなかで、キク、バラ、カーネーションを除く品目について愛媛県で発生した病害を取り上げ、一部において薬剤の試し散布を行ったので紹介する。

(1) ラクスパー（チドリソウ）の灰色かび病（*Botrytis*）：1991年の11月下旬ころから新葉が褐変する症状が現れ、12月末から翌年1月初めにかけて管理の手抜きもあり、新葉や茎が突如として灰色の黴や菌糸に覆われ、ハウス全面にわたり激発した。そこで、①発病茎葉をことごとく除去し②思い切った換気を行い③ピンクロゾリン水和剤1,000倍液の1回散布を実施したところ、葉害はなくその後の発病も見られず高い防除効果を示した。

(2) デルフィニウム・ストック・ラクスパーの立枯病（*Rhizoctonia*）が散発したため、メプロニル水和剤1,000倍液を株当り500ml程度かん注したところ、葉害もなく有効であった。また、トルコキキョウ茎腐れ（仮称）（*Rhizoctonia*）が発生したため、メプロニル水和剤およびバリマイシン液剤1,000倍液の散布を行ったところ葉害もなく有効であった。

(3) ストック菌核病が一部発生し、ピンクロゾリン水和剤1,000倍液を散布したところその後のまん延はなく有効であった。

(4) スターチス（ソピア）褐斑病（*Cercospora*）が植え付け当初より発生し、葉剤散布による防除試験を実施中であり、マンゼブ（葉での汚れがやや目につく）・キャプタン・TPN 1,000・チオファネートメチル・カスガマイシン銅・トリフルミゾール水和剤はいずれも葉害はみられていない。なお、1992年DDVP乳剤500ppm液を散布したところ、葉および花茎の周縁が黄化～褐変するかなり激しい葉害の発生をみた。

(5) スターチス（ウイグロズ）うどんこ病（未記載）が発生したため、農水省北海道農試畑病害研究室へ送り同定を依頼している。

(6) マーガレット根頭がんしゅ病が発生したため、農水省果試安芸津支場病害研究室へ送り同定を依頼したところ、*Agrobacterium tumefaciens*であることが明らかになった。

(7) ユリ（カサブランカ）青かび病（*Penicillium*）の発生をみた。

高知県の露地栽培トウガラシ類に発生するウイルス病

竹内繁治（高知県農業技術センター）

高知県内の露地栽培トウガラシ類に発生するウイルス病の種類を調べるため、1991年5月～9月に、県下15市町村40圃場でウイルス病様症状を示した61株を採集し、判別植物に対する接種試験と電顕観察を行った。

その結果、27株でCMV、8株でTMV、1株でBBWV、1株でCMVとBBWVの両方の感染が確認され、24株からはウイルスが検出されなかった。CMVに感染した植物の多くは、葉に退緑斑点、えそ輪紋、モザイクを生じ、糸葉や茎の条斑えそがみられる場合もあった。果実は退緑するとともに、縦方向の伸長が抑制される傾向が認められた。一

方、TMVに感染した植物は葉にやや軽いモザイクを生じ、果実にもモザイクが生じる場合があった。また、BBWVに感染した植物では葉に軽いモザイクがみられた。

次に、CMVの感染が確認された植物からウイルスを分離し、ヒョウタン、シロウリ、水原在来99号アズキおよびエンドウに対する寄生性を検討した。その結果、ヒョウタンおよびシロウリに全身感染するものと、アズキおよびエンドウに全身感染するものに大別された。さらに、これらの抗血清を作製し、血清型を調べたところ、前者はY型、後者はP型であることが明らかになった。

徳島県における稲こうじ病発生実態調査 I

谷口京子・青木一彦・大植美香・板東康成（徳島県病害虫防除所）

稲こうじ病の発生予察方法を確立するため、県内の稲こうじ病の発生実態について調査を行なった。

平成3年度及び4年度の県内の稲こうじ病発生分布調査では、普通期中心地帯の県西部や、県南部の早期と普通期が混在している盆地状の地形で発生圃場が多く見られた。一方、平坦な低湿地である早期中心地帯では発生が殆ど見られなかった。

品種間の発病の差異については、農業試験場内で4月27日と6月18日のそれぞれに移植した異なる品種の任意100株を調査し、発病穂率を求めた。4月27日移植では、調査した12品種においてホンユタカ、北陸153号が他の品種と比較して高い発病穂率を示した。6月18日移植では、調査した16品種においてタカナリ、中国134号、ホンユタカ、ハバタキが他の品種と比較して高い発病穂率を示したが、ヒエリでは発病が確認されなかった。ホンユタカについては両移植期で高い発病穂率を示しており、稲こうじ病に対する感受性が高いので

はないかと思われる。

発病による収量及び品種への影響について農業試験場内で多発したホンユタカを採取し、一穂当たりの病粒数（1粒～10粒）別に穂を分け、それぞれの一穂当たりの不稔粒発生率、登熟歩合、精玄米重を求めた。その結果、一穂当たりの病粒数が増えるごとに不稔粒の発生率は高くなり、登熟歩合と精玄米重では低下がみられた。稲こうじ病が多発することによって収量や品質に影響を与えらると思われる。

一穂内の病粒形成位置は一穂当たりの病粒数が1粒から5粒の全ての場合で穂内の上位の一次枝梗から下位の一次枝梗へ行くほどその着生率が高くなっていった。

菌核の形成については、稲こうじ病の発病調査の際注意深く観察した。農業試験場内のアケノホソで菌核の形成を確認し、調査株100株の総病粒数における菌核形成病粒数の割合は2.2%であった。その他ホンユタカでも確認された。

香川県におけるBLASTAMの適合性

白井英治・川原清剛・宮下武則（香川県病害虫防除所）

イネ葉いもち予測プログラムBLASTAMの香川県における適合性を検討した。

過去4年の発生圃場率および平均発病株率の推移とBLASTAMの予測結果を比較した。

1989年～1991年は広域での適合性を検討した。その結果、いもち病の中・多発地域については、感染好適日の約7日後に発生圃場率が急激に高まる傾向がみられた。しかし、いもち病の少発地域では感染好適日が出現しても、葉いもちはほとんど発生しなかった。

1992年には、いもち病の多発地域にあたる満濃町江畑地区内での適合性を検討し、過去3カ年の中・多発地域と同様の結果を得た。したがって、中・多発地域についてのみBLASTAMによる発生時期の予測が可能と考えられた。

また、同地区内の11圃場を対象に、圃場別の適合性を検討した。その結果、5圃場については感染

好適日の約7日後に初発生し、その約7日後に発病株率が高まりBLASTAMの予測結果と適合した。

BLASTAMの予測よりも発生時期が早かった2圃場については、早くから取り置苗に病斑が認められたので、これらからの感染があったものと考えられた。その他4圃場のうち、2圃場では移植時期が4月25日、5月1日と早かったため、また、1圃場では防除が行われたため、いずれも発病が少なく適合しなかったと考えられた。

BLASTAMによって薬剤の防除時期を予測するため、感染好適日の翌日に、イソプロチオラン粒剤を水面施用したところ高い防除効果が得られ、感染好適日の直後が粒剤の施用適期と思われた。ただし、好適日の出現頻度、パターン、防除薬剤の剤型、など各種要因を総合的に解析し、利用方法を確率する必要がある。